

文人畫選

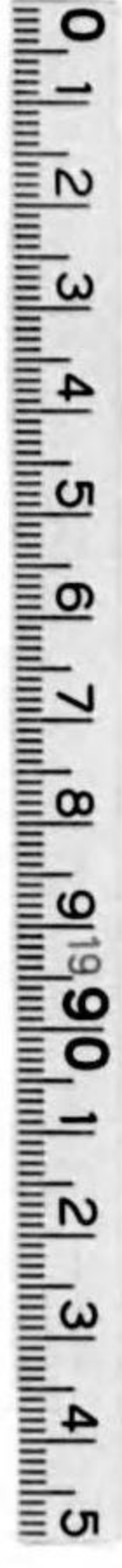
第二輯 第一冊

特280-13



特280

3



始





文人畫選 第二輯第一冊

一一一唐王維伏生授經圖卷 絹本淡彩 高八寸五分 橫長一尺四寸七分

歸堂學人 大村西崖鑒輯
北京 完顏景賢君藏

王維字は摩詰。大原祁の人。開元九年の進士なり。天寶の末、安祿山の禍に罹り、肅宗の世に至りて再び登用せられ、尙書右丞に至る。乾元二年卒す。歳六十一。唐書に本傳あり。詩名世に高く、其著輞川集今に行はる。詩中に畫あり。畫中に詩あり。山水平遠、雲峰石色、絶迹天機、繪者の及ぶ所に非ず。書は草隸に工なり。曾て山水訣を著し、水墨を以て畫道の上乗と爲せり。晩年宋之間の藍田の別墅を得て之に居る。輞水その舍下を周り、竹洲花塲、景趣頗る奇勝。摩詰高趣ありて佛理を信ず。毎に道友と舟を浮べて來往し、詩を其中に賦し、琴書以て自から娛む。明の董其昌に至り、摩詰を以て南宗文人畫の鼻祖と爲す。遺作の今に存するもの極めて稀なり。茲に掲ぐる所幾ど唯一の寶蹟たり。夙に宋朝の御府に藏せられ、宣和畫譜及中興館閣續錄竝に之を記し、元の趙子昂のこれを臨したることは明の都穆の寓意編に出で、その餘、嚴氏畫記、孫退谷の庚子銷夏記、朱竹垞の曝書亭集、宋肇の西陂類稿等に見えたり。今是に由りて之を考ふるに、前隔水綾上、題簽に王維寫濟南伏生とあるは、南宋高宗皇帝の筆にして、上に乾封の小圓璽を用ゐたり。紹興の跋亦當時の物とす。宣和中秘の璽はこれより先徽宗の鈴する所なり。明代この畫金陵黃琳の藏したりし時、顧起元これを觀て驚歎置かず。その著客座贅譚亦これを録せり。黃琳、美之・休伯等の印は、當時押す所。後孫退谷、宋漫堂の右に歸す。故に又北平孫氏、北海孫氏珍藏畫記、宋肇審定等の印あり。歷代鑒藏の名品、その尊きこと、眞に拱璧も管ならず。描法古雅、韵致極めて高くして、毫も作家の習氣を見ず。畫に對して宛も右承其人を見るが如し。因みに曰ふ。伏生名は勝。濟南の

大正
11. 7. 24
内交

人。秦の時曾て博士たり。漢の文帝の時、能く尚書を治むる者を求む。伏生年已に九十餘。龜錯をして往いて之を受けしめ、二十九篇を得たり。これを今文の尚書とす。圖は即ち伏生の几に凭り、卷を把りて經を授くる所を寫せるなり。今全卷の外、別に畫のみを寫したる影本を載す。併せて以てその畫趣を明にすべし。

三 宋范寬重山複嶺圖卷

絹本水墨 高一尺三寸八分 横長一丈四尺

北京 完顏景賢君藏

范寬諱は中正。字は仲立。華原の人。性温厚にして大度あり。故に時人目して范寬と呼ぶ。山林の間に居り、常に危坐して終日縦目四顧、以て其趣を求む。雪月の際と雖も、必徘徊凝覽して以て思慮を發す。李成の筆を學び、精妙を得たりと雖、尚其に出づ。遂に景に對して造意し、繁飾を取らずして、山の眞骨を寫し、自から一家を成す。故に其剛古の勢、前輩を犯さず。是に由りて李成と並び行はる。宋天下を有ちてより、山水を爲る者、惟李范を絶と稱す。時人議して曰はく。李成の筆は近づき視て千里の遠きが如く、范寬の筆は遠く望むも坐外と離れず。謂はゆる神に造る者なり。米芾曰はく。范寬の山水は業々として恒俗の如く、遠山多くは正にして折落勢あり。晩年墨を用ゐること太多く、土石分たず。明の夏士良曰はく。范寬の山水、始め李成を師とし、又荆浩を師とす。山頂好みて密林を作り、水際に突兀たる大石を作る。既にして乃ち歎じて曰はく。其人を師とせむよりは造化を師とするに若かずと。乃ち舊習を捨て、居を終南太華に卜して、編く奇勝を觀る。落筆雄偉老硬、直に山骨を得て、關李と並馳方駕す。遺作傳世已に極めて稀なり。予の採訪する所、蹟信すべきは唯此一巻のみ。惜むらくは全卷を影寫するに遑あらず。纔に卷末三尺六寸許を撮影せるのみ。然れども亦以て其剛古の勢を賞するに足れり。樊頭の山頂、鬱葱たる密林、亦此圖に於いて之を觀る。學者須らく參究して以て宋初の風格を領畧すべし。隔水行書三行、米元暉の書する所。清の高士奇曾て此卷を獲て、之を江村鎖夏錄に載せ、後又長

歌を作りて卷末に題せり。今并び存す。

四 巨然秋山問道圖軸

絹本水墨 高五尺一寸六分 横二尺五寸四分

清 帝室内府藏

釋巨然是江寧の人。山水董源を祖述して聲譽あり。聖朝名畫評に其畫を叙して曰はく。古峰峭拔、宛立風骨、又林麓の間に於て多く卵石を爲る。松柏草竹こもく相掩映し、旁に小徑を分ちて、遠く幽寂に至るが如き、野逸の景に於て甚備れりと。此圖其趣を同じうするものあり。嘉慶鑒賞の遺寶にして、石渠寶笈三編に出づ。

五六 徽宗皇帝晴麓雲圖軸

紙本水墨 高四尺六寸三分 横二尺二分

北京 汪士元君藏

徽宗諱は佶。神宗の第十一子なり。藩に在る時、嗜玩早く凡ならず。事とする所、獨筆研丹青圖史射御のみ。紹聖元符の間に當り、年始めて十六七。盛名聖譽已に布いて人間に在り。位に即いてよりも、萬機の餘暇、惟畫を好む。故を以て秘府の藏充物填溢、先朝に百倍す。古今の名人、上は曹弗興より下黃居采に至るまで、集めて一百帙十四門と爲す。總べて一千五百件。名づけて宣和睿覽集と曰ふ。前世の圖籍、未是の如きの盛あらざるなり。是に於いて聖鑒周悉、筆墨天成、妙に衆形を體し、兼ねて六法を備ふ。尤も翎毛に長ず。衆史能く及ぶ者なし。鄧椿錄する所、奇禽異鳥の畫册の如き、寔に古今に冠絶せりと言ふ。予觀る所徽宗の蹟、清内府所藏の臨古卷を以て尤と爲す。後當に印して世に示すべし、之に亞く者則此圖なり。上に御筆を以て四字を題し、璽「御書之寶」を鈴せり。畫風臨古卷觀る所に同じく、題字亦然り。今別に畫面のみを撮影して以て鑒賞に便す。

七 劉松年高山流水圖軸

絹本青綠 高五尺七寸 横三尺

北京 陳寶琛君藏

劉松年は錢塘の人。清波門に居る。俗呼びて暗門劉といふ。淳熙畫院の學生たり。紹熙の年畊織圖を進めて旨に稱ひ、待

詔に補せられ、金帯を賜はる。初め張敦禮を師とす。山水樓臺人物、神氣精妙、其師を過ぐ。時に院中の絶品と稱せらる。本圖は其遺作中稀に見る大作の佳品なり。前清帝室の寶物なりしが、近年宣統帝之を太保陳毅菴に賜ひ、今其藏する所たり。

八 元吳鎮蒼虬圖軸 紙本水墨 高四尺一寸一分 一尺七寸二分 北京 汪士元君藏

吳鎮字は仲圭、梅花道人と號す。嘉興の人なり。山水宋の巨然を師とし、墨竹は文同に仿ひ、俱に妙品に臻る。又墨花に長じ、兼ねて寫像を能くす。元季四家中、筆力の遒勁は仲圭を以て尤と爲す。人と爲り抗簡孤潔、勢力と雖も奪ふべからず。詞翰草書亦工なり。至正十四年卒す。歲七十有五。遺作傳世多しと雖も、贋偽百出、眞品に値ふこと極めて難し。本圖の如きは洵に稀觀の佳蹟なり。

九 唐棣浮嵐暖翠圖軸 紙本淺絳 高四尺三寸一分 一尺二寸五分 上海 蔣孟蘋君藏

唐棣字は子華。吳興の人。茂材に由りて吳江縣尹たり。山水郭河陽を學び、又趙孟頫の華潤森鬱の趣を得たり。本圖は至正二十四年作る所の佳品にして、曾て乾隆御府の珍たりしものなり。

十 陸治荷花圖軸 紙本淺彩 高三尺九寸八分 一尺三寸三分 北京 陳漢第君藏

陸治字は叔平。包山に居り、包山子と號す。吳の諸生なり。寫生徐氏の遺意を得、山水宋人に仿ひて、時に己の意を出す。處士の服を衣て、支硎山下に隱れ、菊を種えて自から守ること泊如たり。個儻義を嗜み、孝友を以て稱せらる。詩及古文辭を爲り、又行楷を善くす。萬曆四年卒す。歲八十有一。本圖以て其輕淡なる花卉の技風を觀るべし。

十一 徐渭雜畫冊頁 紙本水墨 各頁高九寸三分 闊一尺二寸 東京 菊池惺堂君藏

徐文長の傳は第一輯に出でたり。此冊吳墨井及宋漫堂の舊藏たり。墨井の「青藤墨賞」の舊題猶存し、每頁一家の藏印あり。

後歸安の吳雲之を獲て藏し、三十六頁を分ちて上下兩冊と爲す。今其一頁を掲ぐ。青藤得意の佳作、以て其特長を賞するに宜し。冊中の款印、集めて卷末に載す。

十三 清吳歷仿王叔明山水軸 紙本水墨 高四尺六寸一分 闊一尺六寸四分 東京 菊池惺堂君藏

吳歷も亦其傳前に出でたり。今收むる所の圖、王叔明に仿ひて而も焦墨の渴筆を以て之を作り、沈鬱渾厚、遺作中洵に得難き絶品なり。

十四 黃鼎仿黃大癡山水軸 紙本水墨 高四尺七分 闊一尺九寸八分 五厘 東京 菊池惺堂君藏

黃鼎字は尊古。曠亭と號す。又獨徃客の別號あり。晩に更に淨垢老人と號す。江蘇常熟の布衣なり。山水、法を王原祁に受け、游覽天下に徧し。評者謂ふ。王石谷は古今の名畫を看盡して、筆を下せば成處あり。黃尊古は九州の山水を看盡して、筆を下せば生氣あり。竝に大家と稱せらる。雍正八年卒す。歲八十有一。本圖は其佳作の有數なるものなり。

十五 楊晉蔬菜冊頁 紙本設色 影本實大 東京 杉溪六橋君藏

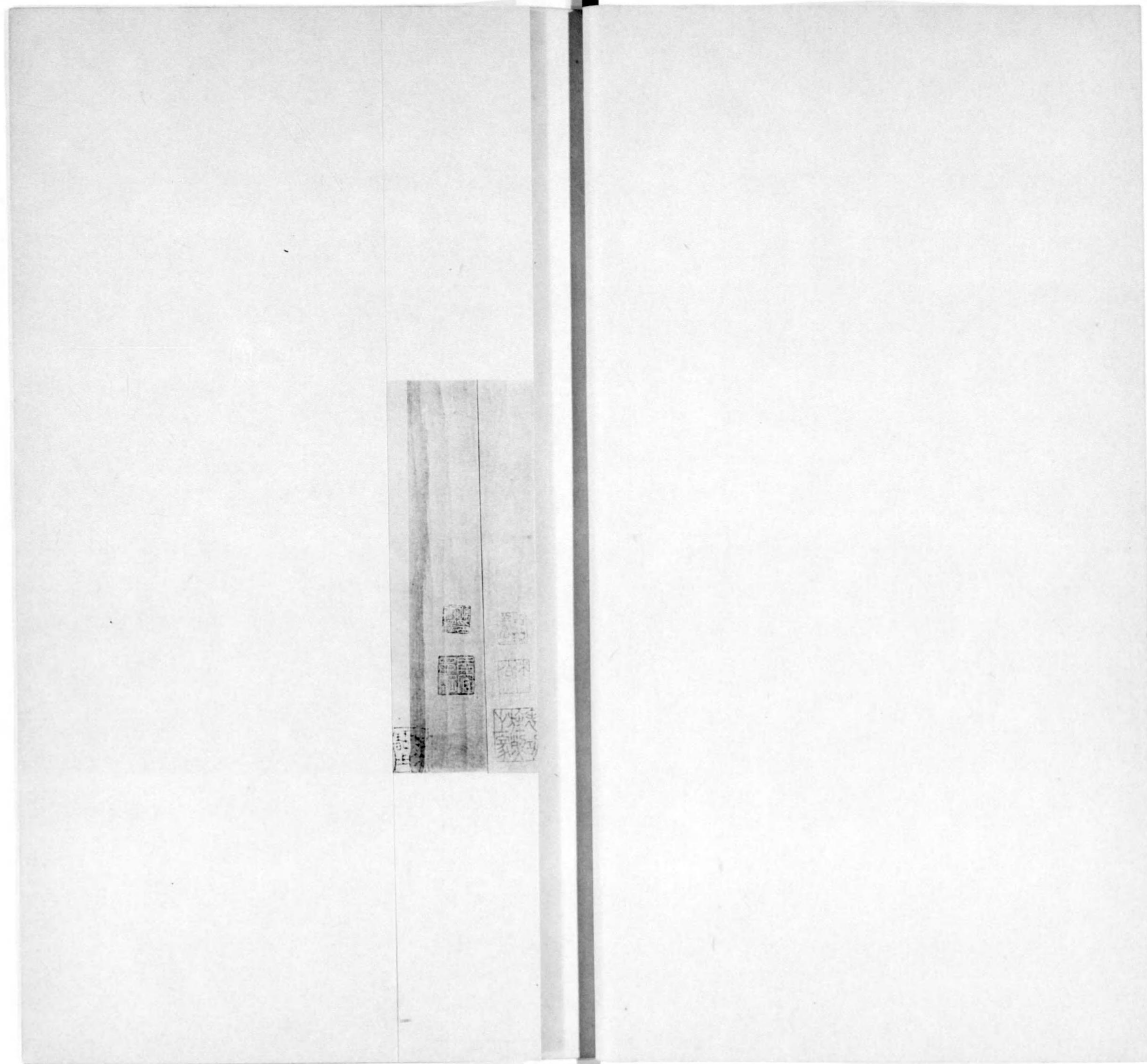
楊晉字は子鶴。西亭と號す。常熟の人なり。山水清秀。王石谷の高弟なり。兼ねて人物花卉寫眞を工にす。此冊以て其面目を窺ふべし。

十六 王應綬林垌幽趣圖卷 紙本水墨 高七寸六分 闊長六尺二寸五分 金澤 細野燕臺君藏

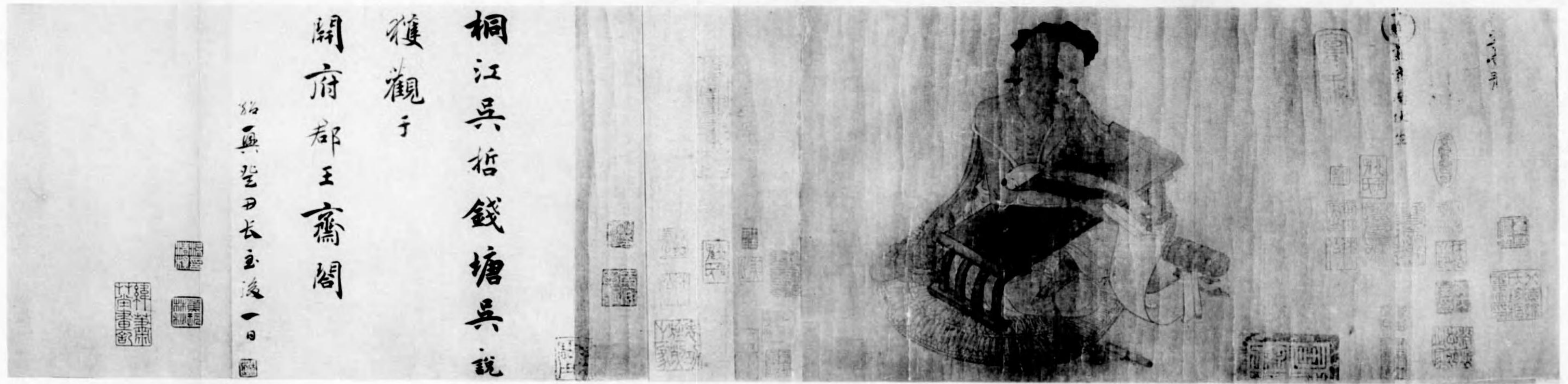
王應綬は未だ其傳を検出せずと雖も、此卷の題記に依りて、嘉慶間の人なるを知る。清秀の畫風亦見るに足れり。

十七 渡邊華山程子像軸 紙本淺彩 高四尺一寸七分 闊一尺八寸五分 東京 平井榴所君藏

大友、徐渭以下諸圖款印



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5



桐江吳哲錢塘吳說

獲觀于

開府郡王齋閣

紹興甲子長至後一日

陳善堂
竹南書室



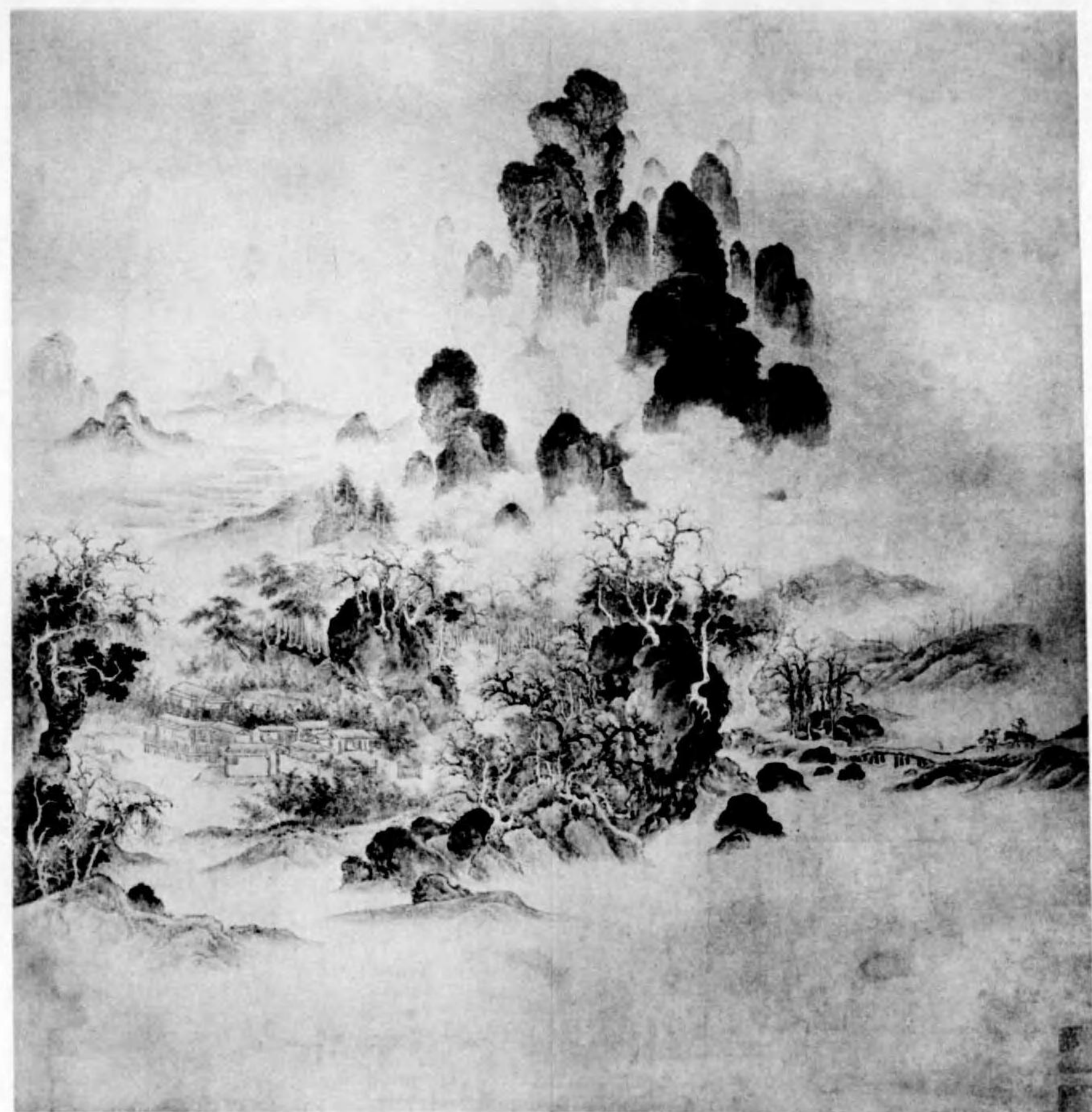
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15



華嚴院中主著作畫山景
古志遜泉迹世新及景
泰山不雕靈錫好為是











五石頂以松竹伏于古亭之側
蘇子瞻詩云心天目山為第四林
梅二畫

此松之老也... 蘇子瞻詩云心天目山為第四林... 梅二畫

此松之老也... 蘇子瞻詩云心天目山為第四林... 梅二畫



平泉山房山景
淡墨畫松石
清松林大景
丙申夏月丁
沈

淡墨畫松石
清松林大景
丙申夏月丁
沈

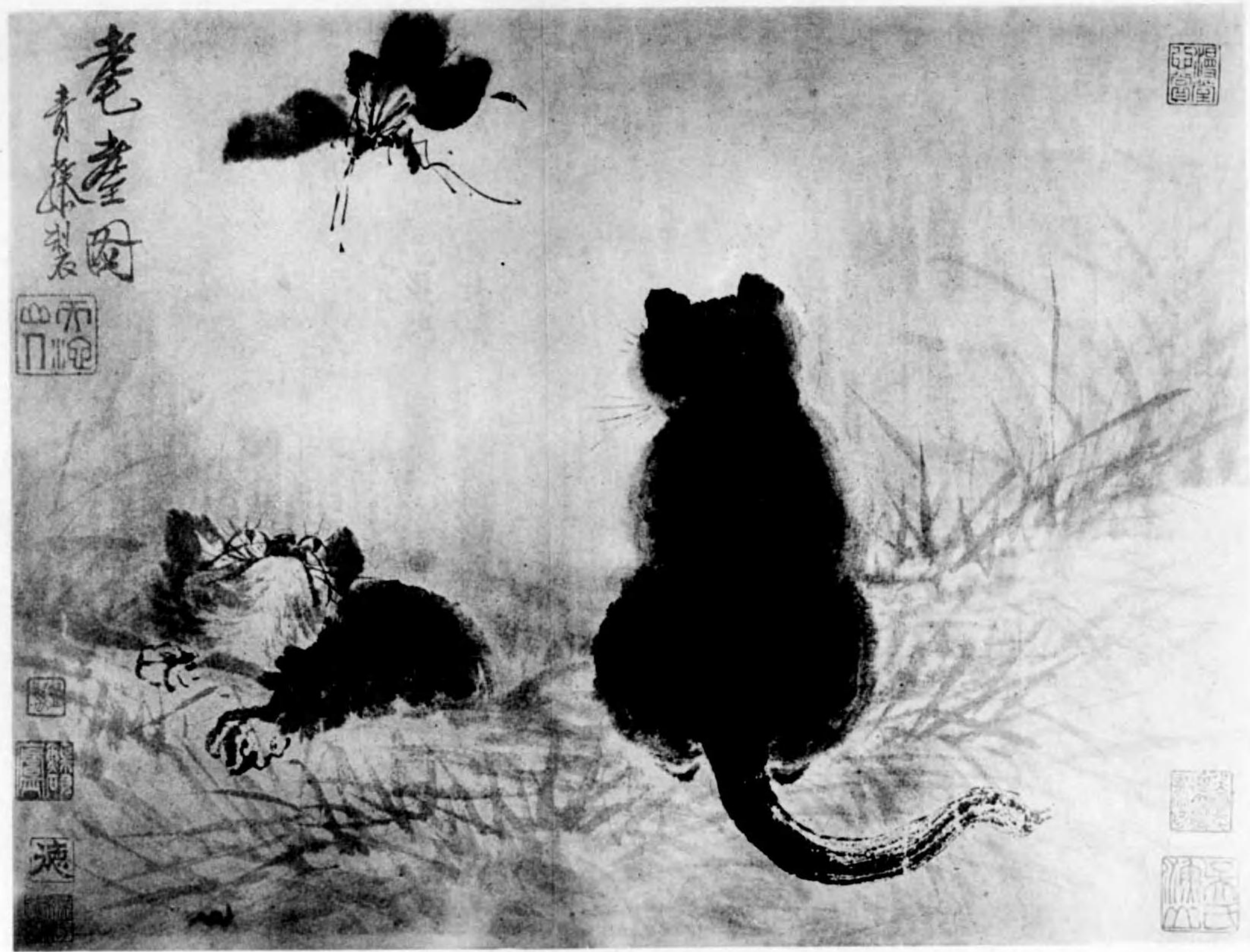
平泉山房
沈





牡丹為富貴花也先朝奪國故
多以鈎索烘托是長今以潑墨
雖有^之云^云終不是也真自蒼
今年富貴人性多移訂宜玉禁
富碩風若為半宜弗 如此也

天
三





香林山王景
康熙壬午年
上巳日
畫

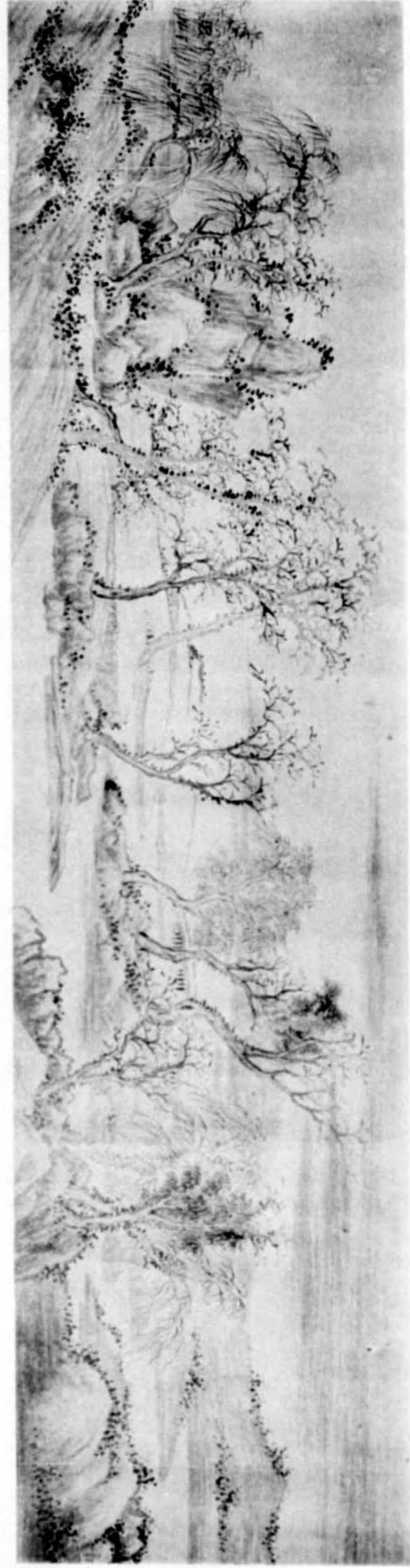


丙午年清月夜
在滬寓大滬
畫堂主人
畫



丙戌九秋西亭楊晉







道衰千載
聖遠言
濁不有
先覺
孰聞
我
人書不
多言
圖不
盡意
風月
無邊
危年
交臂

公孫閱
二月
庚子
日
沈
君
作

徐渭畫冊款印

徐渭畫冊款印

丁巳山人海

天池山人海

青之徐

徐渭

文

徐渭

丁巳

徐渭

天

徐渭

丁巳

青之徐

吳歷山水款印

黃鶴山樵王蒙



康熙丙子九月既望臨于

三松堂即小請正

雲峯學長

吳歷



王應綬林垌幽趣圖卷款題

管潤

林垌幽趣圖

嘉慶庚辰春

日臨石田筆意

於耳畫室

王應綬



黃鼎山水款印

雍正戊申清明後三日在保陽之退
思閣寫大癡老人慨金圖筆法
淨垢老人鼎時年六十有九



王應綬林坳趣圖卷追題

庚辰五月
廿又六日
江王應綬
并記



渡邊華山程子像款印

乙未閏七月朔二日敬寫於金樂
堂南樓後學渡邊登



大正十一年七月廿六日印刷
大正十一年七月廿日發行

編輯者 東京市牛込區矢野町三番地西崖十二號
大村西崖

發行所 東京市牛込區矢野町三番地西崖八號
丹青社

水上市齊
振替口座東京貳七四壹番

終

